



チュービンゲン大学での留学生活から

山田 望

今から 20 年前の 1984 年から 1 年余り、私はドイツ連邦共和国（当時の西ドイツ）南部にあるチュービンゲン大学に留学した。見るもの聴くものすべてが新鮮で心躍るような留學生生活の毎日だったが、学生が学問研究に没頭するには最高の環境が整っているというのが第 1 印象だった。

私の場合、修士論文提出という至上命令があったので、日中はほとんどゼミナールに出るか図書館で過ごした。図書館は町の中心部に最も大きな中央図書館がある以外に、各学部学科ごとに独自の図書館があり、私は、Neu Philologicum（通称ノイフィロ）と呼ばれる近世以降の文献学を研究する学部の図書館に毎日通った。中央図書館には、貴重本は別にして、出版社から出された欧文文献で揃わないものは何もないと言われるほどありとあらゆる書物が揃っていた。留學生でも 100 冊まで、しかも 1 年の返却期限で借りることができた。

これに対してノイフィロは開架式の図書館で、貸し出しは認められない。その代わりに、そこに行けば必ず目的の本を定位置で目にするという利点があった。ノイフィロには、各階の窓際に沿って一人用の棚つきの机が並んでいて、学生たちはどれか一つの机を自分用に独占して棚にノートや筆記用具を置きっぱなしにし、家族や恋人の写真まで貼り付けていた。貸し出し不可、書架から移動させた本は閉館前までに返本台に返すなどと不便な点はあるものの、朝行けば必ずお目当ての本が定位置にあるというのは有り難かった。館内には Liegewiese と呼ばれるカーペットを敷き詰めた台が至る所にあつて、勉強に疲れると学生たちはそこに寝そべてて仮眠を取ったり、横になったまま本を読んだりしてつろいでいた。ドイツの図書館というのは、本を大切に保管するところというだけでなく、本を利用する人を大切にすることであった。

20 年前、チュービンゲン大学の中央図書館で、東洋史を研究していたドイツ人学生の友人が、「こんなものがあるよ」と言ってみせてくれた本があった。それは、Sir Wallis Budge 著、The Two Monks of Kublai Khan という本で、1929 年にイギリスで出版されたものだった。景教というキリスト教の一派に属する元の国の修道者の旅行誌に関する研究書で、その友人は東洋人ならば興味があるだろうと思って声をかけてくれたのだった。当時その分野に全く興味のなかった私は、ばらばらとめくっただけでその本を彼の手に返した。

その後、私は、ゲルマニストから「キリスト教の異端」の研究者に転向したが、2 年前、南山大学のカトリック文庫から景教関係の文献を数冊借りた際、その中に佐伯好郎訳『景教僧の旅行誌』という本があるのに気づき、原著の表題を見て驚いた。20 年前にドイツ人の友人が見せてくれたまさにあの本だったからである。不思議な縁に、景教の研究を手がけたいとは思いつつ、この 2 年間、全く手をつけられないでいる。しかるべき時が来たら本格的に研究してみたいと、少なくともその思いだけは温めている。

(Nozomu YAMADA : 総合政策学部教授)

高田三郎氏について ―― 音楽と人生

児玉あずさ、今井和子、牧野多完子

“ 私たちの道は、どのひとりにとってもその人ひとりだけの道であり、いわば、道なき道を踏み分けつつ歩き続けていくのである。「誰も戻って来たもののない道」を...”

(高田三郎著『来し方(道しるべ)』より)

2005年に開催予定の「愛・地球博」では、学校法人南山学園の主催により、高田三郎作品による「ひたすらないのち 愛知演奏会」が開催される予定である。この演奏会の話が進められる中で、本学キリスト教学科西脇純助教授が典礼聖歌の研究をされていること、本学が高田氏の出身地・名古屋のカトリック大学であることなどが背景となり、本学図書館にも何点かの資料をご寄贈いただけることとなった。これに先立ち、カトリコス誌上で高田三郎氏の経歴や業績などを紹介することとしたい。

《寄贈資料について》

今回、留奈子夫人のご好意により、ご寄贈いただくこととなった資料は以下のとおりである。

演奏会・講習会収録のビデオテープ 23 本

演奏会・講習会収録のカセットテープ 115 本

市販 CD 6 枚

手書き楽譜「主の祈り」「教会の祈り (一部)」

出版楽譜「やまとのささげうた」「典礼聖歌分冊 (9 冊)」

雑誌「ことばとしるし」45号(1982年)から98号(1987年)

「聖シルベストロ騎士団長勲章」の授与書(コピー)と解説書(オリジナル)

典礼聖歌関連の研究論文

についてはデジタルダビングをした後、高田家に返却することとなっている。デジタルダビングをする際、作品名、指揮者、演者等のインデックスをつけ検索できる形にして保存していきたいと考えている。

の楽譜について、氏は著書の中で「私は自分の髪の毛の黒をぬいてそれをペンにつけ一音符一音符書いてきたつもり」と記されている。このような思いで書かれた自筆譜は大変貴重な資料であり、楽譜をもとに実際に演奏された の資料と関連づけた形で閲覧できるようにしていきたい。

雑誌「ことばとしるし」は、氏が毎月1回、4年半にわたって「連載・典礼聖歌解説」を書き続けてこられたものである。この雑誌は大学図書館では全国でも所蔵している館が少ない。本学に所蔵し、

典礼聖歌関連の研究論文とあわせて典礼聖歌を学ぶ学生が利用できる環境を整えていければと思う。この他、高田氏による合唱指導、演奏会などを記録した資料を所蔵されている方に貸出を依頼し、デジタル化し保存していくことを検討している。すでに数人の方から資料を送っていただいているが、どれもこと細かに収録されており、あらためて多くの人々に感動を与えた作曲家であると実感している。

上記で紹介した資料については本学カトリック文庫の中に「高田三郎コレクション(仮称)」を設置し閲覧できる状態にしていきたいと考えている。また、万博の演奏会の機会には、寄贈資料を公開し目録リストが作成できればと考えている。

《経歴などについて》

氏は1913（大正2）年12月に名古屋市に生まれ、武蔵野音楽学校（現・武蔵野音楽大学）へ入学する18歳までを名古屋で過ごしている。同校では呉泰次郎に、その後、東京音楽学校（現・東京芸術大学）本科作曲部では細川碧に和声を、片山頼太郎には和声楽を、信時潔からはバッハを、クラウス・プリングスハイムには和声のレッスンやワーグナーを、対位法をヘルムート・フェルマー、管弦楽法をマンフレート・グルリットから、その他ハンス・シュヴィーガー諸氏に師事し、音楽についてひたすらに勉強と研究を重ねていった。研究科に進学してからはプリングスハイム、フェルマー、グルリットから作曲と後に指揮法を学び、個人的にもヨゼフ・ローゼンシュトック、レオニード・クロイツァーに師事している。レッスンは厳しくまたそれに費やす時間も相当であったが、当時のことを自身は「私にとっては、いろいろな勉強が進むにつれ、名曲としてあがめていた作品の、音の組み立てや曲の構造がだんだん深く判ってきて、一層その曲が魅力を増すという日が続いていた。どんなに大きな喜びの毎日であったことか」と回想し、作曲に当たっては「その音楽の構成音の中のあるべき音は全部揃え、あるべきでない音は全部取り除く」ために十分に長い時間をかけ、集中して推敲したと語っている。この時代に音楽の技術や手法、音の選び方について綿密に多くを学んだであろうことは確としている。また、信時のレッスンについて「大バッハにならいつつ、生きたことばを、生きた音で組み立ててゆくことを学ぶこのレッスンは、ただの音の扱い方ではなく、私の中に、生きた音楽というものの在処（ありか）を示しつつけてもらった時間であった」とのことばから推し量ることができるように“音楽とは何であるか”という本質についても十分に確信を深めていったのではないだろうか。氏の音楽の素晴らしさは、完成度の高いテクニックのみならず、常にその根底に流れているもの故であると感じざるを得ない。音楽はそれを表現し、より深く伝えるための究極の手段として用いられたからこそ、一切無駄のない音と純粹なことばのみが緻密に配列された、高みへと続く音楽が練磨されていったと。

また、研究科生になった頃「作曲という一生の仕事、それが私自身にとってなんであるのか、その一応の方向を出しておかなければもう先へは進めない地点に達していたのである」と感じ、「結論の出るような問題ではもちろんないが...（中略）...二、三の原則を立てるまでになった」。その原則とは次のとおりである。

- 一、「<思い付き>で作曲することはやめる。思い付くうちはよいが、思い付かなくなったら作曲をやめなければならないから」
- 二、「ひとつひとつの作品が常に次の作品の土台となっていくような心構えで書き続けよう。そしてそれを一生積み上げていこう」
- 三、「<日本語のテキスト>を持った作品か、<日本の旋律>と関連ある作品を書いていこう」

三については、特に、国語の深い味わいまで書けるのは、毎日そのことばで生活し続けてきた者であり、旋律にしてもムードでなく本当の精神を生かすことのできるはその民であるという考えの下、日本語のテキストと日本の旋律に拘った。また、それはわれわれの責任であると。「日本人たちのために、私は私の一生を使おう。日本には日本の音楽史があるべきであり、また、私には私の音楽史があるべきなのだ」と決意を固めている。

なお、音楽学校時代以前にも、兄弟妹や友人と教会へ通ったり、ピアノを習ったり、たくさんのレコードを鑑賞するなど音楽との関わりは幼い頃から始まっていて、「作曲を生涯の仕事にして、日本人たちに答えられる曲を作りたい」と強く思うようになっていく。なぜなら「子供のころから青春へかけての胸いっぱいさまざまな『なぜ?』に、これらの交響曲の楽章のいくつかは確かに答えてくれたのである。それは暗闇の中に輝き出た希望の光のように私を照らし、温めてくれた」からである。死とは何か、人間は何なのか、自分はだれなのか、何のために生きるのか...氏は音楽と文学の中に、これらの“?”についての答え（または答えに近いもの）を見だし、深く魅了されていく。「このふたつは表裏一体

となつて私を支え続けてくれた... (中略) ...作曲する私の精神的支柱となり続けることによって」。文学の中でも特に魅了されたのは詩であった。神によってつくられたことばの中から、伝えたいことや伝えるべきものを正しく表現するもののみを厳選して出来上がる詩は、詩人のことばの結晶である。作曲家はメロディーとハーモニーを厳選しその調和を神に捧げる。詩の内容と音楽の深さが一体となり、伝えられるべきものが人々の心に届くのである。氏が作曲のためのテキストとして多くその詩を使った詩人高野喜久雄氏はこう言っている。「ことばで辿り着けるところには限界があって、そこでとまっているとそれらはだんだん貧しいものになっていく。そこで立ちすくんでいるところを音楽が解き放ち、つばさを与え、その大きな力で舞い上がっていく。初めてきた時は“こんなことがあってよいものか”と思うくらい感動した」と。ここに、高田氏が音とことばの両方に拘った理由がはっきりと表れているのではないだろうか。

《典礼聖歌について》

第二バチカン公会議により、それまでラテン語によっていたミサを、それぞれの国語で執り行ってよいことが認められた。これにより、氏は日本カトリック司教協議会の依頼を受けて、日本語による典礼文と典礼聖歌の作曲を手掛け、1992 (平成 4) 年 1 月、ローマ法王より“聖シルベストロ騎士団長勲章”を授与される。これは氏の永年にわたる音楽上の業績に対して贈られたものであるが、典礼聖歌作曲への取り組みが高く評価されているであろうことは否めない。氏は、「聖書は、永く永く人類の信仰の中心であり、この中からのテキストは、単純な解釈によって作曲できる程度のもでは全くなく、私の『詩』というものとの永く親しい交わりと、その真実を味わう鑑賞の習慣とは、とうとう私を『詩』の源流である『詩編』と出合わせ、今までのさまざまな経験と知識とを深く生かす機会を与えられた」と語っている。ことばと音に拘り続けた氏が、典礼文、典礼聖歌の日本語による創作と作曲の任に引き合わせられたのは、やはり必然と言って然るべきだろうか。それらは、神のことば、神と人間との対話、祈りなど、究極のことばと言えるからである。

また当然に日本的なミサ曲にも拘り、雅楽の旋法や浄土宗のお経の旋律などを取り入れて作曲を行っていく。(「雅楽の旋法は中国から渡来したものであるが、それすら日本の特徴を持った旋律に永い間かかって近付いていくのである」。) 1994 (平成 6) 年、豊中混声合唱団のローマ演奏旅行中、5 月 1 日 (日) 午前、復活節第 5 主日としてパンテオンで日本語歌唱ミサが初演され、午後の演奏会とともに全ヨーロッパに放送されたそうである。翌日には、サン・ピエトロ大聖堂で日本語のミサが捧げられたが、ミサ後には一般の参会者の方々が涙を流しながら合唱団のメンバーに握手を求めた。指揮者の須賀敬一氏によれば「ことばを越えて美しい音楽があの人々の心打ったのではない。ひとつひとつの日本語のことばにぴったりの旋律に心から感動して歌っている我々の、その感動があの人たちに伝わったのである」ということである。このように、高田氏が研究科生のときに立てた前掲の原則は一生貫かれ、その作品を通して体現されていったのである。

高田氏の作曲された典礼聖歌は本学の入学式・卒業式を始め学内で行われるミサなどでよく歌われており、教職員や学生にとっても馴染み深い音楽となっている。

《主な業績について》

- 1961. 12 交響曲「わたしの願い」 芸術祭賞受賞
- 1964. 12 合唱曲「水のいのち」 芸術祭奨励賞受賞
- 1969. 11 合唱曲「橋上の人」 芸術祭大賞受賞
- 1978. 4 紫綬褒章
- 1978. 12 混声合唱組曲「内なる遠さ」 芸術祭優秀賞受賞

1979. 4 国立音楽大学名誉教授
1986. 4 勲四等旭日小綬章
1992. 1 聖シルベストロ騎士団長勲章

【聖シルベストロ騎士団長勲章：The Commandership of Pope Saint Sylvester】

『教皇勲章：Papal Decorations』のひとつで、教会・教皇への貢献や功績のあった人（信徒）を称え、教皇庁から授与される勲章。広義には『教皇騎士号：Pontifical Knighthood』の授与も含まれ、かつては侯爵・伯爵といった爵位の授与も行われていた。この他に「キリストの最高勲章」「ピウス9世勲章」「聖グレゴリウス大教皇勲章」「聖墳墓勲章」「プロ・エクレシア・エト・ポンティフィケ（教会と教皇のために）勲章」などがある。

別名：聖シルヴェステル騎士団長勲章

《おわりに》

高田氏は、上に記した作曲家としての活動の他にも武蔵野音楽学校や日本大学、清泉女子大学、国立音楽大学で教鞭をとり学生や若き音楽家の指導にあたりながら、数多くの演奏会をこなし、コンクールなどで審査員または審査員長の任を務め、オーケストラや合唱団を指導し、音楽以外の趣味にも精通していた。一人の人間のどこにこれほどまでのエネルギーがあるものだろうか。氏について書かれた文献の中に「二倍の速さで二倍の距離を歩んで」というタイトルのものがあるが、もし人生に密度という尺度があるならば、2000年10月に帰天されるまで、実に二倍以上に濃い人生を全うされたのではないだろうか。氏の作品としては、典礼聖歌のほかにも「水のいのち」「無声慟哭」などの合唱曲を始め数多く著名なものがあり、その活躍は枚挙に暇がない。

残念ながら本学では所蔵していない資料もあるが、高田氏については以下に詳しく記載されているので参考にされたい。これらは拙文執筆にあたり多く参考とさせていただいた。

高田三郎『随想集 くいなは飛ばずに』 東京：音楽之友社, 1988. 6

高田三郎『来し方 回想の記』 東京：音楽之友社, 1996. 12

高田三郎『ひたすらないのち』 東京：カワイ出版, 2001. 11

国立音楽大学附属図書館高田三郎書誌作成グループ編『人物書誌大系 31 高田三郎』 東京：日外アソシエーツ, 1995

また、聖シルベストロ騎士団長勲章については、以下の資料を参考とした。

マシュー・バンソン著『ローマ教皇事典』 東京：三交社, 2000. 8

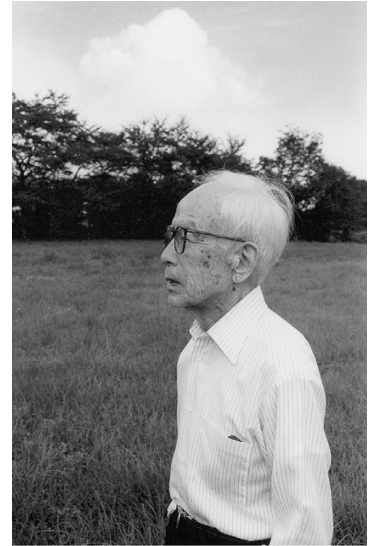
P. G. マックスウェル・スチュアート著『ローマ教皇歴代誌』 大阪：創元社, 1999. 12

小林珍雄著『キリスト教百科事典』 東京：エンデルレ書店, 1960 など。

(Azusa KODAMA, Kazuko IMAI, Takako MAKINO : 図書館事務課)

高田三郎 略年譜

1913. 12. 18 愛知県名古屋市に生まれる
 1939 東京音楽学校（現・東京芸術大学）作曲科卒業
 信時潔、クラウス・プリングスハイムに師事
 1954～1979 国立音楽大学教授
 1979 同名誉教授
 1963～1968 日本現代音楽協会委員長
 1979～1984 日本現代音楽協会委員長
 1978 紫綬褒章受章
 1986 勲四等旭日小綬章受章
 1992 聖シルベストロ騎士団長勲章受章
 （ローマ教皇より。典礼聖歌の作曲活動に対して）
 2000. 10. 22 帰天



撮影 山口昌子（無断転載を禁ず）

高田三郎 主要作品

- オペラ** 舞台上の叙事詩「蒼き狼」（1972年、文化庁委嘱作品）
カンタータ ソプラノ、バリトン、ナレーター、合唱と管弦楽のための宮澤賢治の詩による「無声
 慟哭」（1964年）
管弦楽曲 「山形民謡によるバラード」（1941年）ほか
室内楽曲 「ピアノのための前奏曲集」（1948年）
 「木管五重奏のための組曲」（1952年）
 「マリオネット」弦楽四重奏のための組曲（1954年）ほか
合唱組曲 「Cantus Mariales Iaponici（雅楽の旋法による「聖母賛歌）」」（1959年、Santa
 Cecilia 協会より委嘱）
 「わたしの願い」（詩 高野喜久雄、1961年、NHKより委嘱）
 「水のいのち」（詩 高野喜久雄、1964年、TBSより委嘱）
 「心の四季」（詩 吉野弘、1967年）
 「橋上の人」（詩 鮎川信夫、1969年、CBCより委嘱、芸術祭賞大賞）
 「内なる遠さ」（詩 高野喜久雄、1978年）
 「ひたすらな道」（詩 高野喜久雄、1979年）
 「イザヤの預言」（1979～1980年）
 預言書による「争いと平和」（1983年）
 「ヨハネによる福音」（1985年）
 「啄木短歌集」（歌 石川啄木、1988年）
 「渡辺直己短歌集」（歌 渡辺直己、1996年）
 「マリアの歌」（詩 村上博子、1999年）ほか
独唱組曲 「ひとりの対話」（詩 高野喜久雄、1971年）ほか
典礼聖歌 ミサ賛歌「やまとのささげうた」（1963年）
 「ミサ賛歌Ⅰ」（1969～1975年）ほか多数
著書 『くいなは飛ばずに』（音楽之友社、1988年）
 『典礼聖歌を作曲して』（オリエンズ宗教研究所、1992年）
 『来し方 回想の記』（音楽之友社、1996年）
 『ひたすらないのち』（カワイ出版、2001年）
写真集 山口昌子『高田三郎 主の祈りの作曲家』（山口昌子音楽事務所、2001年）

愛・地球博パートナーシップ事業

高田三郎作品による「ひたすらないのち 愛知演奏会」

混声合唱とピアノのための 預言書による「争いと平和」

大久保混声合唱団 指揮 辻志朗

混声合唱とピアノのための「イザヤの預言」

豊中混声合唱団 指揮 西岡茂樹

男声合唱組曲「内なる遠さ」(編曲 須賀敬一)

東海メールクワイアー 指揮 今井邦男

山形民謡によるバラード

オルガン 吉田文

女声合同合唱

女声合唱組曲「遙かな歩み」

指揮 須賀敬一

男声合同合唱

「典礼聖歌集」(男声合唱編曲 高田三郎/須賀敬一)

指揮 須賀敬一

『典礼聖歌』より「ミサ曲Ⅰ」 南山大学合唱団 南山大学管弦楽団

指揮 小松一彦

五つの民俗旋律 南山大学管弦楽団

指揮 小松一彦

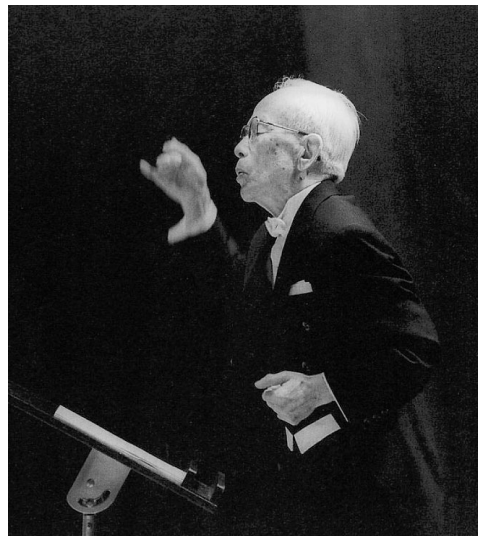
500名の合同合唱

混声合唱組曲「水のいのち」 管弦楽編曲版 委嘱初演

委嘱編曲 トーマス・マイヤー＝フィービッチ

南山大学管弦楽団

指揮 小松一彦



高田三郎 (1913-2000)
撮影 山口昌子 (無断転載を禁ず)

2005年9月18日(日) 午後2時30分開場 午後3時開演

愛知県芸術劇場コンサートホール 全自由席 3,000円

主催 学校法人南山学園/高田三郎作品による「ひたすらないのち 愛知演奏会」実行委員会

共催 南山大学宗教教育委員会/東海メールクワイアー

お問合わせ「ひたすらないのち 愛知演奏会」実行委員会事務局

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18 南山大学宗教教育委員会内

電話：052-832-3111(代表) ファックス：052-832-3925

資料寄贈者 (前号以降 ~ 2004.9)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。ここにお名前を掲載させていただき、改めて謝意を表したいと存じます。

[個人]

ブレシ神父、穠山アイ子氏、濱口吉隆神父、栗村道夫氏

[団体]

聖母の騎士修道女会 (長崎県北高来郡小長井町)、愛徳姉妹会 (神戸市垂水区)、
聖母カテキスタ会 (名古屋市昭和区南山町)、光ヶ丘女子高等学校 (岡崎市大西町)

カトリック文庫委員会新委員紹介

藤塚あつ子 (図書館事務課逐次刊行物係)

委員を拝命したものの、世界にこれだけ多大な影響力のあるキリスト教について、恥ずかしながらほとんど知識がありません。奥深い背景を持つカトリックの資料に触れられるこの好機。これを機に知識を深めるよう努め、委員の仕事をまっとうできればと思います。

児玉あずさ (図書館事務課受入係)

久しぶりに図書館に戻ってきて、カトリック文庫委員会委員となりました。

高田三郎先生の資料整理を終えたら、カトリック文庫のあり方についてももう一度じっくりと考えていきたいと思っています。

上田義彦 (図書館事務課主幹)

カトリック・・・普遍の哲学としてとらえ探究するものなのか、、、安らぎを得るための宗教として理屈抜きに信心するものなのか。。ともあれ、主として『カトリコス』の編集要員としてメンバーに加えられました。宜しくお願いします。

カトリック文庫委員会旧委員からのひとこと

石田昌久 (教育・研究支援事務室)

“視野は広く、着手は狭く”を心掛けて仕事に取り組んできましたが、結局、中途半端に終わりました。

申し訳ない思いでいっぱいです。

今後のカトリック文庫の発展をお祈りしています。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス第 19 号 2004. 10. 1 発行

南山大学図書館「カトリック文庫」委員会

編集委員：藤塚あつ子、岩間潤子、上田義彦

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

ホームページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/publication/katholikos/katholikos-index.htm>

E-mail: library-n@nanzan-u.ac.jp TEL: 052-832-3163 FAX: 052-832-3462 担当者：児玉

